

岡部陽二コレクションの経緯

今年開設20周年を迎えられました「鉱研ミュージアム・地球の宝石箱」と私の繋がり、開館のちょうど一年前に始まりました。

鉱研工業(株)の株式公開を担当されました山一証券の三橋正則氏から、「同社に素晴らしい鉱物標本が多数あるので、見せて貰いましょう」というお誘いがあり、1996年の春に同社諏訪工場をお訪ねしたのです。

工場の周辺には同社がボーリング工事を手掛けられた南米やアフリカなど世界各地から集められた巨大な標本が所狭しと積み上げられており、多くの鉱物標本を見慣れた私もその規模の大きさに目を瞠りました。1年後には同社の創業50周年を記念して30億円の工費で立派な博物館が竣工し、そこで展示されるというご予定を伺いました。

私はただ標本の素晴らしさに感嘆するばかりでしたが、開設準備委員長の加藤信一氏（初代博物館長）はじめスタッフの方々から、鉱物博物館のあり方についての質問が矢継ぎ早に寄せられ、主客転倒したのには驚きました。

これは、その前年の1995年11月21日付けの日経新聞文化欄に私が寄稿しました「“地球の滴” 神秘さ永遠に～鉱物収集の趣味の輪、日本でも広がる」をご高覧いただき、世界の鉱物博物館を廻ってきました私から何らかのヒントを得たいというご熱意に他ならないものでした。

種々ある感想のうちの大きなポイントは、同社で蒐集された巨大標本は際立って立派なものですが、博物館と称するからにはあらゆる種類の鉱物を系統的に展示すべきではなかろうか、という点でした。

その解決策として、当時、東北大学に眠っておりました「南部コレクション」を譲り受けてはと提案申し上げました。

といいますのも、偶々半年前の1995年10月に次男の岡部徹が東北大学素材工学研究所（現多元物資科学研究所）に赴任、この有名な南部コレクションの管理を任されておりました。物好きの私はすぐに観に行って、このように整った国産鉱物の標本群が死蔵されているのは勿体ないと痛感していたところだったのです。

東北大学の資産は国有財産ということで、民間への譲渡は難しいのではと懸念

しましたものの、鉾研工業の素早いご対処でとんとん拍子で話が纏まりました。南部松夫博士と当時の江口工鉾研工業㈱社長のお二人の間を私が仲介する形で、1,000点の学術鉾物標本を一括無償で譲り受けることができたのです。

私のささやかな鉾物コレクションもいずれはこの博物館に収めていただきたいものと、この時すでに密かに心に決めておりました。ただ、当時は自宅の車庫を展示スペースに改造したばかりであり、タイミングを見計らっておりましたが、傘寿を超えました段階でようやく実現した次第です。

私の鉾物収集は、京都に住んでおりました中学三年生のころ、近くに益富壽之助博士が開設された鉾物標本館（現益富地学会館）があり、たまたまこの標本館を覗いたのがきっかけでした。美しい鉾物が奏でる造化の妙に魅せられて、鉾物収集を始めたのです。

思えば、収集歴は70年になります。採掘現場に出掛けての採集は高校時代がピークで、就職後はしばらく休眠状態となりました。ところが、1976年にロンドン勤務となり欧州各地へ出張しますと、どんな小さな町にも鉾物の原石や化石類を専門に扱うミネラル・ショップとか、ナチュラル・ストアーと称する趣味の店が沢山あることを知りました。

はじめのうちは出張の合間を見付けては立寄り、気に入った石を一つ二つと買い求めておりましたものの、ついには原石を求めて休暇を取ってブラジルや南アフリカにまで足を延ばすようにもなりました。今回引取っていただきました約500点の標本は根尾谷産の菊花石など一部を除いて、ほとんどが外国産の鉾物です。

世界中から蒐められました鉾物たちに安住の地をご提供いただきました「鉾研ミュージアム・地球の宝石箱」に改めて感謝申し上げます。

2017年7月

岡部 陽二

文

化

地球の滴、神秘を永遠に

◇鉱物収集の趣味の輪、日本でも広がる◇

岡部 陽 二

会があり、手にハンマーとタガネ、首にルーペを下げて関東近隣、時には東北南部まで足を延ばす。

ただ、鉱物採集は狩りのようなもので、念には念を入れた事前の準備をしても目指した獲物がとれることはほとんどない。また、専門店といっても、一般に扱っている石の種類はごく限られている。鉱物収集もその意味では忍耐のいる趣味である。その代わり、美しい結晶や形の優れた鉱物に巡り合えたときの喜びは何物にも替えがたい。

数年間まではこうした鉱物の専門店が京都に二軒しかなかったが、最近では東京でもかなりの数の専門店が店を開き始めている。しかし、たまに安い、と思つて飛び付くと合成石だったりする。鉱石もやはり鑑識眼を養わなければならず、そのためには他の芸術と同様、本物を数多く見るほかにない。

色鮮やかに輝く結晶鉱物の美しさや不思議な形状をした奇石の神秘さに魅せられて石の収集

を始めたのは、中学生のころだった。これは当時、私が住んでいた京都の、鞍馬口で鉱物標本館を開設していた益壽寺の助という市井の大先生がアマチュア収集家のために主宰されていた

「日本鉱物趣味の会」に入門していたおかげである。

南アフリカにまで遠征

この会では肉眼鑑識だけで競る鉱物鑑定会を毎月開いてい

た。地質鉱物学専攻の京大生に

交じり、結晶や劈開(へきかい)の微妙な違いを読み取る訓練を

したものだ。「日本鉱物誌」と

いう分厚い図鑑に載っている石

を求めて、住んでいた京都近郊

だけでなく、近畿から中国地方

の主要な山地を踏破した。

社会人になってからロンドン

をベースに欧州各地へ頻りに出

張するようになると、どんな小

さな町にも鉱物の原石や化石類

を専門に扱うミネラル・ショップ

とか、ロック・ショップと称

する趣味の店が沢山あることを

知った。はじめのうちは出張の

合間を見つけては立ち寄り、気

に入った石を一つ、二つと買い

求めているものが、ついには休

暇を取って原石を求めてブラジ

ルや南アフリカにまで足を延ば

すようになった。その甲斐もあ

って、数年で五百種余りの立派

な標本がそろった。

石を求めて出掛けた町で最も

強く印象に残っているのは、ド

イツのイダル・オーベルシュ

タインだった。ここはルクセン

ブルクとの国境に程近い人口五

千人くらいの小さな町で、昔は

ここで瑪瑙(めのう)などを産

出していたが、今では外国から

輸入した宝石・貴石の原石を加

工して世界中に売り捌(さば)か

れている。立派な鉱物博物館を

中心に、珍しい貴石の置物や原

石を所狭しと並べている土産物

の種類の細分化も精々四千種、

図鑑に載っているのは通常三百種

程度に過ぎない。とはいえ、同

一種でも形や色合いは人間の顔

形同様、全部違って

いる。石には顔がある、と思つて

いる。こうしたことから収集し

た標本の数はいつい増え、整理と

保管にいつも悩まされている。ガ

レージを改造して保管している

が、ザルツブルクの岩塩の結晶

などは日本に長く放置しておくと

湿気を吸って水浸しになってしま

う。石の標本も時々水をかけて洗

ってやると、見違えるように生

気を取り戻す。欧米の文化は石の

文化でもある。アルプスで産出する

透明な水晶を古代の人は雪が凍

って出たものと思ひ込み、ギリシ

ヤ語で氷を意味するクリスタルと

呼んだ。アメシスト(紫水晶)も

ギリシヤ語の「酔わない」を語

源としており、これを身に着ける

ことによってワインの悪酔いを防

ぐと信じられてきたとい

う。

家屋一つとってみても石造りが

基本で、屋内の装飾にも原石や石

の彫刻を多用している。経済人

にも鉱物収集を趣味の一つにして

いる人は少なくない。パリ、プ

ラハ、マドリッドと各都市には

素晴らしい石の博物館が設置さ

れている。パリのユリイ夫妻大

学の地下標本室は、かつてナポ

レオンによって収集を命じられた

コレクションがあつて充実して

おり、展示棚もゼララス張り、標本を

引き立てている。

東京の国際フェア盛大

しかし、何となくともスケール

の大ききで他の追随を許さな

いのは、ワシントンのスミソニ

アン博物館である。収蔵標本

点数万五千点、鉱物原石に加

えて、濃い青色に輝くホープの

ダイヤモンドをはじめ、実に見

事な宝石類が星の如く所狭しと

並んでいる様は壮観である。と

ころでスミソニアンはも

とより、海外のどの博物館にも

ある日本産の鉱物は、日本刀の

刃のような形で鈍い光を放つ愛

媛県・市の川鉱山産の輝安鉱と

ほぼ直角に枝岐(わか)れてい

る山梨県・乙女鉱山の日本式

双晶の水晶である。

今日まで日本の鉱物コレクシ

ョンは個人の収集家と大学の研

究室に限られ、鉱物専門の公営

博物館はなかったところ、昨年

四月に新潟県の新潟市営の「フ

ォッサマグナ・ミュージアム」

が開館した。早速訪ねて見ると、

この博物館は糸魚川市が日本

列島を分断する大構造線の始

点に位置することから、日本

列島の生い立ちを視覚で理解出

来るように設計されている。

また、近くの姫川で取れる弱

翠(ひすい)を中心に世界中から

集めた鉱物・化石を最新の照明

方式で展示し、「地球のしずく

達(たち)」の造形の妙を十分に

感じさせてくれる。総工費十七